

私たちが考える『わらびの未来』 市民ワークショップ

提言書



平成25年2月

【 目 次 】

はじめに	1
1 安心安全なまち・わらびグループからの提言	3
2 にぎわいと活力のまち・わらびグループからの提言	13
3 学び育つまち・わらびグループからの提言	23
4 みんなで支え合うまち・わらびグループからの提言	35



はじめに

(1) 市民ワークショップの目的

この「市民ワークショップ」は、市民の立場から「私たちが考える『わらびの未来』についての提言」をまとめ、これを平成25年度に策定する市政運営の基本指針となる計画（仮称）「コンパクトシティ蕨」将来ビジョン）に反映することを目的としています。

(2) 参加者の構成

この「市民ワークショップ」の参加者は、蕨市では初めての試みとなる「無作為抽出による参加の呼びかけ」に応じた市民23名（ ）と市役所の若手職員6名の合計29名です。

(3) 開催の経緯

この「市民ワークショップ」は、次ページのとおり、平成24年9月から平成25年2月までの6ヶ月間にわたり、全6回開催されました。

参加者の関心に沿って4つのグループを編成し、蕨市の現状や問題点、その解決方法について話し合ったのち、提言の文章化や発表資料の作成といった役割をお互いに担い合いながら、全員が協力し合って提言書をまとめました。

【ワークショップのグループ編成】

グループ名（仮称）と関心のある分野・施策	参加者（敬称略・50音順）
1 安心・安全のまち・わらびグループ （まちづくりで関心のある分野・施策） 防災・交通安全・防犯 など （7名）	青木利広・岩瀬田津郎・工藤幸雄・ 黒河内光子・長本修・松井さち子・ 米田名保美
2 にぎわいと活力のまち・わらびグループ （まちづくりで関心のある分野・施策） 道路・交通・公園、産業 など （7名）	井野千賀子・小澤健・黒崎喜代子・鈴木実・ 長谷川理明・藤澤恵子・茂木宏一
3 学び育つまち・わらびグループ （まちづくりで関心のある分野・施策） 学校教育・生涯学習・文化振興 など （8名）	安達謙・河野久子・小池尚・櫻川智史・ 菅野知子・中島わかな・成田弘子・芳賀孟
4 みんなで支え合うまち・わらびグループ （まちづくりで関心のある分野・施策） 保健・医療・福祉 など （7名）	赤松奏子・石村英司・木村洋子・高谷祥平・ 福地茂雄・前博雄・松本和昭

参加を辞退された方を除いています。

【ワークショップの開催スケジュール】

回・実施時期	ワークショップの内容
第1回 平成24年 9月9日(日) 午後1時～4時	オリエンテーション 『市民ワークショップとは?』 グループワーク 『自己紹介、意見交換』 (ふだん関心のあることから・問題だと感じていることから など)
第2回 10月13日(土) 午後1時～4時	グループワーク 『こうあったらいい! 未来の蕨市』 (目指すべき蕨市の姿 など)
第3回 11月11日(日) 午後1時～4時	グループワーク 『良い点を伸ばし、問題点を解決しよう!』 (蕨市の魅力を活かす方策・問題点の解決方策 など)
第4回 12月9日(日) 午後1時～4時	グループワーク 『意見を整理してみよう!』 (これまで話し合った内容の確認・提言書への落とし込み など)
第5回 平成25年 1月20日(日) 午後1時～4時	グループワーク 『提言書にまとめてみよう!』 (提言書の整理・確認 など)
第6回【発表会】 2月24日(日) 午後1時30分 ～4時	グループ発表 「私たちが考える『わらびの未来』についての提言」 (グループ代表等による発表)



1 安心安全なまち・わらびグループからの提言



《メンバー》(敬称略・50音順)

青木利広

工藤幸雄

黒河内光子

長本修

松井さち子

米田名保美

岩瀬田津郎(市職員)

《提言一覧》

テーマ1「勇気をもって声をかけ合おう!笑顔で おはよう こんにちは!(安全)」

テーマ2「笑顔あふれる“ほっと”な街 わらび(安心)」

テーマ3「ずっと住み続けたい また来たくなる わらび(美観)」

テーマ4「みんなの笑顔で明るい街に(元気・つながり)」

はじめに

話し合いの経過

このグループでは、「安心・安全な街とはどんな街なのか」あるいは「どうしたら、そうなるのか」という視点で、目指すべき蕨市の姿について全員で話し合いました。また、長く暮らしていると気付かないこともあるという指摘から、改めて現状を確認してみようと、象徴的な駅と駅周辺のまち歩きも行き、「汚いところ」「危険を感じる場所」「何となく居心地の悪いところ」などを確認しました。

基調となる考え方、よく話し合われていたこと

私たちは、安心と安全が毎日の暮らしの最も基本だと考えます。危険で不安になる街に住みたい人はいないはずです。私たちの街、蕨市は決して安心と安全が深刻に脅かされているわけではありませんが、交通の便の良さなどから、新たな住民の入れ替わりも多く、見知らぬ人が多く行き交い、治安の面で若干心配する声が聞かれます。まずは、遊興施設や風俗店などもある駅周辺の雰囲気を清潔に、健全にすることで随分イメージは変わるのではないのでしょうか？また、そうした活動も通じ、市民のつながりを積極的に創っていくことで、人の目が行き届き、汚しにくく、問題も発生しにくい街になると考えます。



テーマ1「勇気をもって声をかけ合おう！笑顔で おはよう こんにちは!(安全)」

<問題・現状>

街中に死角や不安になる場所が多い

死角になる緑が多いということは、ゴミの投棄などが増える要因の一つにもなっています。空き家も多く、ガラスが割られても通報者がいないという無関心さも実際にあります。なお、市には“さわやか環境条例”“空家管理条例”などがありますが、こうした土地は個人所有地であり、実効力には限界があります。

また、東口や西口の裏通りは夜になると暗く危ない雰囲気があります。東口商店街入口には監視カメラがありますが、市営駐輪場の辺りにもカメラは必要ではないでしょうか？

(参考) さわやか環境条例

清潔でさわやかな生活環境を確保することを目的に、市、市民、事業者の責務を定めたもので、罰則規定はない。

蕨市老朽空き家等の安全管理に関する条例

老朽化等により著しく危険な状態となるおそれがある建物に対して、「建物の安全を確保する」という所有者等の当然の責務を果たすよう促すもの。老朽化した空き家等に対する防災対策に特化し、行政代執行による安全確保まで定めているため、一定の実効性を備える。



特に駅周辺の自転車対策は重要

西口の放置自転車撤去は進んでおり、10年前に比べて随分改善していますが、東口の須原屋前には自動販売機が使えないくらい放置自転車が多くなっています。

また、自転車に乗りながら携帯電話を操作していたり、無灯火だったり、マナーを守らない自転車利用者もいて非常に危ない状況もあります。

地区によって心配事が異なる

社会経済状況が変動する中で駅西口前の再開発の方向性がどのようになっているのか気になる一方で、古い家屋の防災対策は十分なのか、また、区画整理中の錦町や大日本印刷周辺などには狭い道路も残っており、富士見グランド近くにはわかりにくい信号などもあります。

さらに、建築工事が耐震整備に間に合っておらず、マンションの耐震問題も重要な課題です。



暮らしの前提となる安心・安全を守る専門機能は十分なのか？

特に多いというわけではありませんが、市内年平均 30 件の火災が現実には発生しており、そのための市の消防体制は 87 人（現場はうち約 50 人）であり、約 20 人の職員と救急車 3 台で 7 万人の安全を守っているということになります。

< 基本的な視点 >

まず、今ある不安・危険を確認・把握し、次に、可能性のある不安・危険を抑止する人の目が届かない場所（＝死角）を減らすため、ハード整備での配慮とともに、人々の交流を盛んにして顔見知りを増やすことが重要だと考えます。

意外に参考にできる具体例が市内にある

ハード整備の際は、植栽を刈り込んで見通しの良い公園（中央公園）や分離されたインターロッキングの舗道（中央 2 丁目、北町 2 丁目など）、散歩しやすい良い雰囲気を通り（要害通りや北町市民病院近くなど）など、参考にできそうな具体例が市内にすでにあります。



誰もが安全に使いやすい駅周辺にしよう

西口の自転車対策は進みましたが、逆に東口が悪化しています。西口同様の取組みで対策を講じる必要があります。

また、現場確認時にも実際に目撃しましたが、外国人は日本語が理解できず、文化もわからないため、駐輪など、街のルールを守れなくても当然です。誰もが安全に使いやすいよう、伝える方策を工夫しなければならないと考えます。

整備中の地区と古い地区の各特性を踏まえた安心・安全な街づくりを

西口の再開発エリアが虫食いの無責任な整備にならないよう、社会経済状況を踏まえ、市民の声も取り入れて頂けるように整備の方向性を注視していきたいと思います。

また、木造の古い家屋が集中するエリアは消防・防災対策の徹底を図らなければなりません。

とにかく、安心・安全を最優先にして

財政はもちろん重要ですが、その中でも安心・安全を最優先すべきと考えます。消防・救急機能としても、事務・管理機能より現場機能に重点配分すべきです。また、行政の効果的な資源配分とともに、市民も適正にこれを利用すべきです。

< 具体策 >

- ・ 防犯カメラを適正な場所に設置する
- ・ 暗い夜道にスポットライトをつけてはどうか（3分くらいで消えるもの）

- ・ 公園の樹木を小学生の背丈以上にしない
- ・ 空き地に農園を作る
- ・ 保護者のニーズが高い、小学校高学年の下校後の居場所としての空き地の整備
- ・ 空き家を子どもの遊び場にする

- ・ 各国語の案内板を取り付ける
- ・ レンタル自転車システムの整備（災害時にも活用できる）
- ・ 放置自転車を再利用してはどうか
- ・ シルバー人材のより一層の活用を行う
- ・ 街中に自転車運転マナーの標識を立てて、罰金制にしてほしい

- ・ 富士見グラウンド近くのイトーヨーカドーに行く方向にわかりやすい標識をつける
- ・ 消防の現場人員（+車両）の補強を行う
- ・ 住宅用火災警報器の普及・推進を行う
- ・ 70歳以上の一戸建てにインターホンを取り付ける
- ・ 除雪を速やかに行う

テーマ2 「 笑顔あふれる “ほっと” な街 わらび （安心）」

< 問題・現状 >

古くからの住民と新しい住民の交流がない

立地も良く、年間5千人の転出入に対して、10代後半から20代前半の転入、20代後半から30代前半の転出が多いのが蕨市の特徴です。また、外国人の増加も著しいものがあります。逆から見ると、高齢者は長く暮らしている傾向もあります。その中で、古くからの住民と新しい住民の交流がないという現状があります。

例をあげると、

- ・14戸以下のアパートは管理者がいないことから、結果として見知らぬ人が増える
- ・一概には言えないが、新住民は町内会等への参加にも積極的でないことが多い
- 一方で、長く暮らしている人たちは町会・自治会等を通しての交流も図られています。

例をあげると、

- ・自治会でも安全パトロールをやっている
 - ・コミュニティ委員が5地区（中央、北町、南町、錦町、塚越）で見守り隊をやっている
- しかし、人口1,000人当たりの全刑法犯認知件数による犯罪率は、平成24年1～12月で県内市区町村ワースト2位で、その3割程度が自転車盗など、軽犯罪の発生が目立ち、治安に対する不安が増えています。

また、日中に災害があった場合、コミュニティには高齢者、子ども、女性が残されるため、自助・共助に不安があります。さらに、災害時には水が必要不可欠ですが、給水タンク車が1台しかないことにも不安が残ります。

< 基本的な視点 >

人のつながりがある街は安心 “ 出会いのワラビ ”

人のつながりがある街は安心を生み、犯罪の抑止力もちます。そのつながりを生むにはコミュニケーションが必要で、それが希薄な新住民・外国人も積極的に含めていくことで、全体の安心につながると考えます。また、災害発生直後は自助・共助が重要であり、行政による公助はすぐには機能できません。

< 具体策 >

- ・外国人専用の公共アパートを作ってはどうか？
- ・特に小アパートの住人の情報収集と情報管理の仕組みを
- ・市民の交流に公民館をもっと利用する
- ・国際交流会を利用する
- ・少子化の中で子どもに伝統行事を伝承する
- ・皆でラジオ体操（外国人も）

- ・見守りやパトロールを有効な時間に
 - ・シルバー人材の活用を 安全や保険も十分に確保して
 - ・通学路の駆け込みの家を具体的に表示する（現在はステッカーのみ）＝当事者にも外部にもわかりやすくする（例：旗を立てる等）
 - ・青色パトカーの最大限の活用
 - ・交通安全協会にも通学路の安全対策をやってもらう
 - ・「地域の皆さん、今日も私たちを見守って頂き、ありがとうございます。今日もよろしくお願ひします。」というアナウンスを行政無線で流す（他自治体の事例）
 - ・花の種を“コミュニケーションの種”として子どもたちが配布すれば、その花を家の前で育ててくれている人と交流が生まれるのでは？それが自然に“子ども 110 番の家”のような存在になるのでは？
-
- ・昔ながらのつながりを好まない都会派住民の防災ネットワークづくり
 - ・とにかく、トイレ整備を！（マンションなど）
 - ・水の確保、非常食、非常用具

テーマ3 「ずっと住み続けたい また来たくなる わらび(美観)」

<問題・現状>

新しい住民から見ると、駅・道が汚い(=利用者の意識が低い?)という認識

駅前是通过者が多いためか、汚れが目立ちます。特に改札口前の床面が汚れており、ガム跡が無数にあります。また、駅西口のエレベータ内も汚く、駅前トイレもおいが気になります。

一方で、要害通りは清潔であり、立派な松の木もあって、市内で参考にできるところも多いと考えます。

こうした点は特に新しい住民から見るとわかりやすく、参考になると考えます。

なお、修理の予算はついているとのことでしたが、東口近くの市営自転車置き場の屋根が葺市側だけ破れているのも気になりました。



<基本的な視点>

駅前は「市の顔」なんだから“みんな”でキレイにしよう

駅前は市民だけでなく、市外から訪れる人々も行き来する玄関であり、市の顔であるのに、ゴミはあまり落ちていないものの、ガムの跡や物陰の黒ずみなどはすごい蓄積になっています。

利用者としての意識が低いと汚くなるし、そんな街は不安・危険が増えるという「割れ窓理論」もあります(割れ窓理論:建物の窓が壊れているのを放置すると、誰も注意を払っていないという象徴になり、やがて他の窓もまもなく全て壊される)。

実際に汚れていない道路も駅周辺にあり、個人一人ひとりの意識向上が重要だと思います。自分の家の前をキレイにしておきたいという、誰でも持っている当たり前の気持ちがあれば実現できると思います。特に駅前の場合は、事業者の協力も必要になります。事業者も市民の一員として、夜の清掃等、徹底を働きかけましょう。

<具体策>

- ・「くらしのサポートサービス」の会員を利用する(有償ボランティア)
- ・事業者も一緒に取り組む

元気よくあいさつしながら笑顔で掃除する店員がいるパチンコ店ならあっても良い

- ・JR、周辺事業者、シルバー人材などだけでなく、市民みんなでやるのでは

・中高生のボランティア活動（単位を与える） 近隣住民の有志と一緒に

・道路の排水口の掃除

・駅前県道 110 号の歩道をアスファルトにする
（ツツミ宝石店～城北信金）



テーマ4 「 みんなの笑顔で明るい街に （元気・つながり）」

< 問題・現状 >

人通りが少なくなる原因が街づくりにもあるのではないか

商店街の中で、レンタル倉庫や住宅が道路に面して増えています。また、駅前の商店街にかかっているアーケードは古く、今ではむしろ暗い印象を与えているのではないのでしょうか。さらに、パチンコ店が多く、どうしても不健全なイメージが生まれてしまっています。人通りが少なくなってしまう原因が街づくりにもあるのではないかと考えます。

< 基本的な視点 >

人が集まる場所・コトでつながりを創る

安心と安全には人のつながりが不可欠であると考えており、そのつながりを創るためにはにぎわいが必要だと考えています。そのための街づくりを是非行政と市民と一緒に考えていきたいと思えます。

特に駅前は「市の顔」ですが、現在の駅前は単なる交通の機能だけになっているような印象があり、人の入れ替わりの多い蕨市では特に新しい住民には気づくことが多くあります。こうした市民の声も積極的に活用しながら、空き店舗の利用など、駅前通りの活性化を図ることが重要だと思います。

< 具体策 >

- ・ ちょっと休めるスペースを（同時に、その管理体制も検討が必要）
- ・ パチンコ店などより図書館や文化ホールなどの文化的な施設がほしい
- ・ 小さくて良いので日用品を買える個店を
- ・ 要害通りなどに素敵なお店も増えると良い
- ・ 防災協定のある群馬県片品村の農産物を日常的に販売してはどうか？日頃からの協力や親近感があれば万一の時に頼りにしやすい（お互いに） 東日本大震災後の各地の救済・復旧時にも従前から外部にネットワークを持っていたかどうかが大きく影響した
市内には、生協の商品開発・研究機能などもある



2 にぎわいと活力のまち・わらびグループからの提言



《メンバー》(敬称略・50音順)

井野千賀子

黒崎喜代子

鈴木実

藤澤恵子

茂木宏一

小澤健(市職員)

長谷川理明(市職員)



《提言一覧》

テーマ1 コンパクトなまちの良さを活かそう！

テーマ2 まちのにぎわいを取り戻そう！

テーマ3 わらびの「地域力」をアップしよう！

はじめに

話し合いの経過

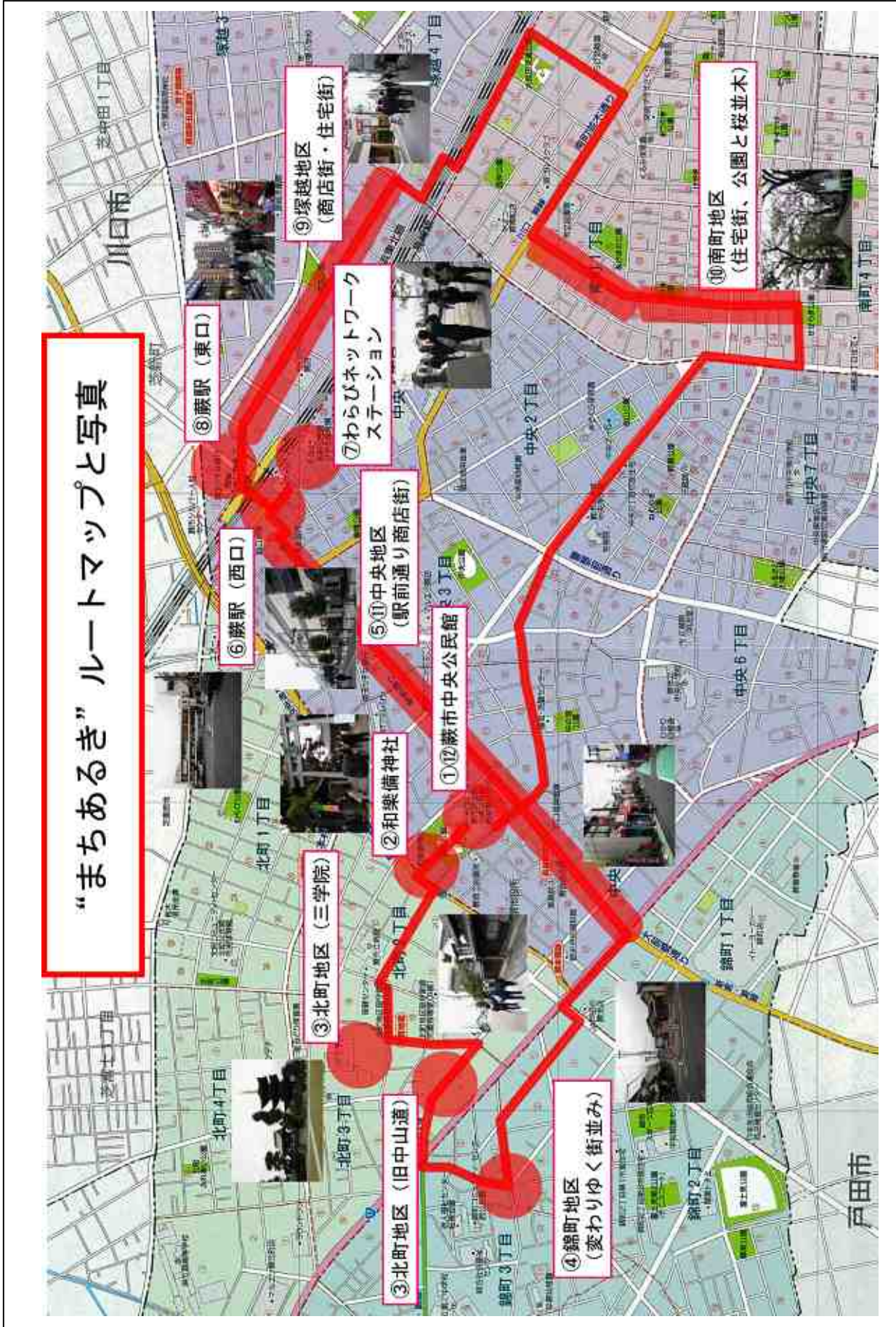
私たち『にぎわいと活力のまち・わらびグループ』では、先祖代々蕨に住む人、進学してから蕨に住む人、働きだしてから蕨に居を持ち移ってきた人、たまたま蕨に住むことになってしまった人など、蕨のまちとの関わり方が異なる多彩なメンバーが集い、さまざまな立場・考え方から、自由に意見を述べていきました。

- ・第1回ワークショップでは、まず蕨のまちの良さとは？特長は何か？について、それぞれの観点から意見を述べました。
- ・第2回では、その良さを活かすにはどうすればいいのだろうか？という課題に踏み込んでいきました。しかし、多少議論が繰り返しになってしまい、煮詰まる場面も出きたため、第3回にて“まちあるき”を実施することにしました。
- ・第3回では、次の行程でまちを歩き、蕨の良いところ（活かしたいところ）等を確認しました。市内5つの町で違った顔・違った良さがあり、それを実際に歩いて共有し、改めて蕨の歴史性・文化性を再認識できました。

蕨市中央公民館	和樂備神社	北町地区（三学院・旧中山道など歴史・文化）
錦町地区（変わりゆく街並み）	中央地区（駅前通り商店街）	蕨駅（西口）
わらびネットワークステーション	蕨駅（東口）	
塚越地区（商店街・住宅街）	南町地区（住宅街、公園と桜並木）	
中央地区（駅前通り商店街）	蕨市中央公民館	

- ・第4回では、“まちあるき”の印象・感想を話し合ったのち、蕨が向かうべき方向性について整理し、提言の柱を3つに整理しました。同時に、提言書の作成に向けた役割分担を決め、各メンバーが原稿を執筆し、第5回にて提言書としてまとめました。





“まちあるき” ルートマップと写真

共通認識

私たち『にぎわいと活力のまち・わらびグループ』は、多彩なメンバーが集っているがゆえに、「蕨のまち」に対する見方が異なる点もありましたが、話し合いを進める中で、次のような“蕨の良さ”については、お互いに共感することができました。

- ◆ コンパクトな蕨には、近隣の市や新興住宅地にはない良さがあり住みやすい。
- ◆ 中仙道蕨宿などの歴史性・文化性があり、機まつりや、神社・仏閣の伝統的な祭礼などもある。
- ◆ 市内5つの町はそれぞれの顔をもっており、人のつながりもある。

しかしながら、“まちあるき”をしてみると、日曜日にも関わらずどの地域も人の通行が少なく、天気が悪かったとはいえ、寂しいくらいまちに人が出ていないのを痛切に感じてしまいました。

このようなことから、まちのにぎわいと活力のためにも、この蕨の良さを内外に何らかの仕掛けで発信していき認識を高めること、また地域のコミュニケーションの維持向上、市内で人が買い物・食事や散歩などで時間を費やしたくなる仕掛けも必要だろうと話し合い、提言の柱として組み込むこととしました。

私たちの想い

「人口密度日本一の小さな蕨市」。都心に出るのも30分、人と人とのつながりも残る、便利で住みよいまちです。

しかし、そんなわがまちの良さを忘れ、あるいは気付かないままに、寂しいまちにしてしまっていないですか？私たちはもう一度、活気ある、市民に愛されるまちを取り戻したい。

小さなまちだからこそ、できることがあります。蕨の良さをみんなで共有し、みんなが手をつないで活かすことができます。

市民一人ひとりの力でまちを育み、市民に愛されることも日本一のまちを目指し、ここに次の3つのテーマを提言します。

提言テーマ 1

コンパクトなまちの良さを活かそう！

提言の背景

蕨市はおよそ 5km²の文字通りコンパクトなまちであり、主なところを 3 時間で歩いて回れます。JR 京浜東北線を利用すれば都心までおよそ 30 分であり、市役所・市立病院・警察・消防をすべて持っていて、すべて、それらが近くにあり、安心・便利なまちです。

また、このまちは、中仙道蕨宿の古い街並みなどに見られるような歴史・文化的な魅力を持ち、三学院・和樂備神社といった神社仏閣、機まつり・宿場まつり、苗木市、成人式発祥の地といった伝統的な行事も息づくまちです。

このまちは、1960～70 年代、東京のベッドタウンとして都市化が進み、駅前通りは、国道 17 号から蕨駅に至る約 1km が蕨銀座商店街として栄えました。

しかし近年では、ご多分にもれず、高齢化と少子化、大型店の進出による環境の変化で、商店街にもシャッターを下ろしたままの商店が目立ちます。

まち全体を見ても、新規の分譲住宅、新築のマンションなどが散見され、移り住んでくる方々もいると推察されるものの、企業の撤退、商店街の活力の低下、商店と住居の混在化が進むなど、かつての元気さを失いつつあるように思います。

提言の視点

上記のような現在の蕨市において、まちが栄え、にぎわうには「蕨ならではのコンパクトなまちの良さ」を市内外にアピールし、人を蕨のまちに呼びこむことが大切だと考えました。

そして、人を蕨に呼びこむには、まず短期的視点としては蕨のまちを訪れてもらうことで、人がまちを歩くことにより、まちがにぎわい、商店が栄え、活力が生まれます。

もう一つは長期的視点、すなわち、就業している世代に移り住んでもらう・住み続けてもらうことが大切であり、税収が上がれば市の政策の自由度も上がり、さらに魅力的なまちになり、さらに人が集まる好循環が生まれると思われます。

ここでは短期的視点から提言していますが、このほか長期的視点からの取り組み例としては、「あったか市政」を基調とした健康・福祉を蕨の魅力として大きく PR し、健康・福祉産業を基盤とした創造的な取り組みなども考えられるでしょう。



私たちの提言

市外に向かって「わらび」の魅力プレゼンテーションしよう！

市外に住まう人々に向かって、「わらび」の魅力プレゼンテーションします。わらびの行事・見所などを発信するものとします。発信方法はWebで。

Webで「わらび」を検索すると見てほしいサイトが一番上にくる仕掛けや、市外に住まう人々の興味を引くコンテンツとデザイン、目玉となるイベントや地域資源をアピールする工夫が必要です。使えるアセット（資産・財産）は和樂備神社、機まつり・苗木市、三学院の除夜の鐘、中仙道蕨宿、歴史民俗資料館・河鍋暁斎記念美術館などが考えられます。

地域をPRする動画をつくり配信しよう！

この蕨のまちの良さを詰め込んだPR用の動画を制作し、Webで配信するなど、さまざまな機会に活用するよう提案します。

オール蕨市として制作する場合と、地区ごとに制作する場合が考えられますが、いずれにしても公募の市民等の自主的な運営により、企画・取材・編集を行うものとします。

特に若い市民（学生等）や、日頃、地域と関わりが少ない市民（東京に通勤するサラリーマン等）の参画が得られれば、蕨市への愛着を高めるためにも有効だと思われませんが、多くの市民が自身の特技を活かして関わることができれば、さらに効果的かと思えます。

市民が「わらびの良さ」を共有できるようにしよう！

広報「わらび」への情報掲載のあり方を工夫したり、市のイベントカレンダーを整理・統合することにより、市民に「わらびの良さ」を繰り返しPRするようにします。

例えば広報「わらび」については、地域の魅力に関する情報を大きくわかりやすくシンプルに掲載するものとします。夜間診療・健診・予防注射など生活に必要な情報は、必要にかられて探すので小さくともよく、一方でまちの行事などは見過ごすので、イベント情報は大きく伝えるといったメリハリを付けるものとします。

これに加え、市域がせまく平坦な地形であることから、徒歩・自転車による“まちあるき”や、「ボランティアガイドウォーク」といった取り組みも、市民が「わらびの良さ」を共有するうえで、有効と考えられます。



提言テーマ2

まちのにぎわいを取り戻そう！

提言の背景

景気の低迷が長びくなか、蕨市の産業も大手の工場が地方へ移転するなど変化しています。このような状況下で寂れてしまった商店街の活性化にどのように取り組み、にぎわいを取り戻すことができるのかが問われます。

第3回ワークショップ「まちあるき・蕨の良さ(問題点)を共有しよう」では、各地区を実際に歩くことで、私たちなりに、例えば錦町区画整理事業の遅れなど各地区が抱える問題点や、地域の歴史・文化、街並みなどの良さを感じることができました。ただ「はじめに」にもあるとおり、実際に“まちあるき”をしてみると、どこの地域も人通りが少なく、商店街の活力低下を感じてしまったのが実情です。

この商店街の活性化に向けては、「機まつりの(時のような)にぎわい」を日常にも取り戻すことができないものでしょうか？

例えば、通りを土・日は歩行者天国とし、パフォーマンスなど楽しく過ごすことができる場所に、人々が出かけてみようと思える様な場所にする。紙芝居やクリスマスのイベント会場として、通りのあちこちの片隅で小さなコンサートが開催されるなど…。さまざまなことが考えられます。

また、提言テーマ3とも関連しますが、「くるる」の幅広い活用も視野に入れ、わらびネットワークステーションを拠点として市民活動の情報や意見を交換し共有し合う、商店街のみならずと市民・行政がお互いに力を合わせて活性化に向けて動き出す、など、活性化を通じて人と人とのつながりをも生み出すことができれば、と思います。

このように、歴史・文化的な資産など“蕨のまちの良さ”を活かしながら、市民がお互いに協力し合って、まちに「人を呼びこむ」「人に歩いてもらう」ための取り組みを重ねることが大切だと考えます。



私たちの提言

わらびのまちを楽しもう！市民のみなさんへの呼びかけ

提言テーマ1では、「わらび」の魅力の情報発信や、広報「わらび」への情報掲載のあり方について提言しましたが、ここでは、それらの媒体をもちい『コンパクトなまち・わらびを楽しもう！』と題して、市民に呼びかけるよう提言します。

今まで地域で育んできた蕨の歴史、年中行事など、四季折々にわらびのまちを楽しみ、盛り上げていけたら、市民の日常の生活にも活力が出て、まちが変わっていけるのではないかと考えます。

年中行事などのいろいろな行事に接すること、体験することで蕨のまちに愛着を感じ、またコミュニティが生まれて、住んで良かった、住み続けたいと思えるのではないのでしょうか？そして、その想いが日常の活力・活性化にもつながっていくことと考えます。

郷土愛を育む「メインストリート」の息づくまちづくり

市民と商店街のみなさま、さらには市が協働することにより、駅前通りや旧中山道といった「メインストリート」を舞台とした、地域活性化に向けた多彩な取り組みを展開するよう提言します。

具体的には、下記の年中行事などを活かしたイベントの充実、空き店舗を有効活用した協働まちづくりの拠点の創出（地域活性化・福祉・防災・人材育成などを含む）などが考えられます。

【活かしたい年中行事など】

春の桜

- ・南町の桜祭り、市民公園や町会のお花見会など。

夏の機まつり

- ・蕨の夏の風物詩として近隣の市からもお客さんが大勢参加し、毎年にごわっています。産業の発展から市民参加のお祭りに方向転換することも必要では（近年では、蕨市内の小・中学校の生徒による七夕のお飾りも出展されているようです。）
- ・町会の盆踊り大会（各町会でいろいろなイベントが用意されています。）

秋の宿場まつり

- ・中山道本町通りで行われる「中仙道武州蕨宿・宿場まつり」はミス織姫やミス宿場小町など大名行列、サンバパレードなどが盛大に行われ、フリーマーケットや模擬店が並び、市民参加のお祭りが開催されます。
- ・町会でも秋祭りが盛んですが、子ども神輿が和楽備神社に集合するようにするなど、子どもたちの交流ができないものではないでしょうか・・・？
- ・秋の運動会、町会の運動会にプラス蕨市民の運動会が毎年実施できたら・・・。
- 冬、和楽備神社のおかめ市、そして初詣
- ・三学院の大晦日の除夜の鐘付きなど。

提言テーマ3

わらびの「地域力」をアップしよう！

提言の背景

これまでに述べてきたように、「コンパクトなまちの良さ」を引き出し（提言テーマ1）、「まちのにぎわい」を取り戻す、あるいは掘り起こす（提言テーマ2）ためには、活動を支える『地域力』が何より必要！と考えます。

では、この『地域力』をどうやって引き出すか、またこの『地域力』を育てることができるか。

これについては今までも各団体で討論され、それなりの蓄積がなされているはずなのに、結果が出ているとは言えない現状があります。

蕨市の特性を考えると、代々、この地に住まう方々も多い一方で、進学・就職・結婚などを契機に他市より転入し、そしてまた他市へと転出していく人も多いと思われまから、市民が「想い」を共有し、「力」をあわせ、蕨のまちに対する「愛」を育みにくい土壤があるのかも知れません。

しかし冒頭に述べたとおり、どのような提言をすることになるろうとも、大切なことは

それがアピランス（見せかけ）に終わりませんように！

ということであり、行政による誠実・着実な取り組みとともに、市民によるまちづくりの力、すなわち『地域力』が不可欠と考えられることから、

地域力を UP させる仕掛け

として、次のとおり提言するものです。



私たちの提言

新しい「無作為抽出型」タウンミーティングをやってみよう！

今回の市民ワークショップは、無作為に抽出された市民が集い、テーマに沿って議論する貴重な機会となりました。このような取り組みを発展させ、新しい「無作為抽出型」タウンミーティングを開催するよう提案します。

市としては、普段なかなか参加できない市民の願いや想いをリサーチする場となり、また市民としては、市民の声を届ける新しい機会となり、改めて『わがまち蕨』を考える人が増え、郷土愛を高めることができれば、アピール力もアップします。

なお、参加者は今回の市民ワークショップのように無作為抽出とし、「いつも決まった人」のみの集いとなることを避けるべきだと考えます。また、これを各地区の公民館で開催し、地区ごとに市民の主体的な取り組みを促していくのも良いでしょう。

市民のニーズとニーズをつないでいく情報空間を確保し、活用しよう！

地域力を高めてまちを活性化したい・・・と望む人はきっと多いのに、なかなか力が結集できない(と感じている)現状があり、市民団体の活動も行われているのに、認知度が低く活用されていないのはもったいない、と考えます。

そこで、既存のものを有効活用し、『わらび市民ネット』(および拠点としての『わらびネットワークステーション』)あるいは『わらび学びあいカレッジ』などを拠点として、これらの機能を有効活用するよう市民に呼びかけ周知することを提案します。

周知の方法としては、現在のところ最も有効と思われる広報「わらび」のほか、市ホームページ、その他このワークショップのような機会など、さまざまな機会を有効に活用していくことが考えられます。

まちを地域力upの場にしよう！

蕨市には、若い単身者が比較的多いという特徴があります。

地域力を高めるためには、若い人、特に日頃は地域とあまり関わりがない人にも関心を持ってもらい、この蕨のまちの未来を担う人として育ててもらい・・・そんな取り組み、仕掛けが必要かと思えます。



何ごともそうですが、“参加して楽しい”取り組みでないと、義務感だけでは長続きしません。ですから、例えば、まちの若手店主などと行政、若者たちが協働して企画する「まちコン」の開催や、さまざまなボランティア活動の企画と参加募集などを通じ、若い人が“楽しく”地域参加できるよう、促していくことも重要だと思われます。

3 学び育つまち・わらびグループからの提言



メンバー (敬称略・50音順)

安	達	謙
河	野	久子
小	池	尚
菅	野	知子
成	田	弘子
芳	賀	孟
櫻	川	智史 (市職員)
中	嶋	わか な (市職員)

《提言一覧》

- テーマ1 こども : face to face のコミュニケーションを目指す
- テーマ2 おとな : 学ぶ楽しさを共有する
- テーマ3 ボランティア : 支えあうことでともに学び育つ

はじめに

私たちの選んだテーマ

私達の「わらび」は、コンパクトシティそしてベッドタウンであり、少子高齢化の進むまちです。

「学び育つまち」の視点から見ると、恵まれた面もあり、また課題もあります。そうした特徴を踏まえて、メンバーは『こども』『おとな』『ボランティア』の3つのテーマについて話し合い、提言をまとめました。

「わらび」はどんな「まち」なのか？

「コンパクトシティわらび」には大きな長所があります。市内には官民様々な施設が徒歩圏にあり便利です（9頁・別表参照）。生徒達に「社会科見学」させたい施設も沢山あって、子供達が「施設の役割・社会の仕組み」を『学べ』ば、立派な社会人になる・・・外国人市民も多いので国際人にも『育つ』、そうした恵まれた『まち』が・・・『わらび』なのです。

日本各地には「少子高齢化」で人口減少に悩むまちもあります。しかし駅前マンション群・錦町地区の開発を見ると、「ベッドタウンわらび」の魅力は衰えません。更に現役引退のシニア層が増え、市内昼間人口も増えると思われます。塚越のイオン、南町のヤオコー、錦町のヨーカドー等の進出はこうした「わらびの魅力」によるものです。この恵まれた側面は活かすべきです。

「わらび」の課題

一方で課題もあります。

ベッドタウンに住む現役世代は「子育て世代」でもあるので、『こども』の問題に注力すべきです。この問題は学校・行政を主力に取組み、シニアのパワーもボランティアとして活用しましょう。

また『おとな』、特にシニア層には様々な「生きがいメニュー」を提示すべきです。メニューには上掲の様な『ボランティア』と、文化・スポーツの「サークル」活動が考えられます。

『おとな』の活動はメンバーの「自立と自律」が原則で、行政はサポート（＝脇役）になるのでしょうか。

3つのテーマに共通するキーワード

私たちの選んだ3つのテーマには共通するキーワードがあります。それは、『コミュニケーション』と『斜めの関係』です。

コミュニケーション

市民生活には情報が必要です。こうした情報提供は行政が主導した方が安心感があります。

そして情報が、行政と個人・大人同志・子供と大人・異世代間・etcの「双方向のコミュニケーション」に発展した時、市民生活は一層充実します。

『おとな』には情報の間口を広くする・・・つまりインターネットの活用を工夫して呼び込み、その後『各自』がface to faceのコミュニケーションに発展させると良いでしょう。

一方『こども』は、ゲーム等の電子メディアに傾きがちなので『各自』に任せてはおけません。『おとな』が様々なface to faceのコミュニケーションのメニューを準備して誘導し、豊かな感性を持つおとなへと育てていきたいものです。

「こども」と「おとな(シニア)」の橋渡し：斜めの関係

すこし「少子化とこどもの問題」についてコメントします。

「少子化」で兄弟が減り、「年の近い叔父・叔母、年長の従兄弟」が急減しました。そのため、こどもの人間関係は

- ・垂直の関係(=親子・先生と生徒)だけが強化され、
- ・斜めの関係(=叔父叔母・従兄弟)が消滅の危機にあり、
- ・水平の関係(=兄弟姉妹・友人)も減っています。

蕨市では「アウトメディア宣言」(注参照)を出し、face to faceコミュニケーションの強化を図っています。

これで「垂直の関係・水平の関係」は改善できるでしょう。しかし、こっそりと『悪事?・余計な事』を教わった、あの「斜めの関係」は復活出来ません。この「斜めの関係」の役割がシニアボランティアの出番だと考えます。

注：蕨市アウトメディア宣言(H23.7)

「アウトメディア」とは、テレビ・パソコン・ゲーム・携帯電話などの電子メディア漬けの生活を見直すことで、未来を担う子どもたちの健やかな成長のため、蕨市として取り組みを広げることを目指すものです。

テーマ 1 こども：

face to face のコミュニケーションを目指す

提言の背景

現代社会は競争社会となっており、子どもの中にも否応なしに競争原理が入ってきています。

しかし、競争で子どもは伸びるのか？ どの面で競争するのか？が問題です。

このような競争社会の中で、子どもの個性を尊重し、思いやり、落ちこぼれを出さない学校教育や、友達ができ、遊びが楽しめる“いじめ”のない学校の存在が求められています。

わからない子はわかるように、わかる子はさらに深く学べる場が求められています。

かつてのように、群れになって遊ぶ中から育っていくべき子どもたちに、今、遊ぶ時間や遊ぶ場所（空き地など）がなくなっていることが深刻な問題です。

子どもたちの遊び場の代わりとなる市の公共施設や公園ではボール遊びが禁止など、遊びが制限されている場合が多いのです。必然的に子どもたちは屋内で過ごすツールとして電子メディア（テレビ・ビデオ・ゲーム・ケータイ等）に長時間接触することになり、子どもの心と体の健やかな成長に影響を及ぼしていると心配されます。

子どもたちの“生きる力”・“社会力”を育てていくために、学校と地域が協調・連携し、子どもたちとのコミュニケーションを通じた大人の理解と指導が大切な課題だと考えます。

私たちの視点

- ・大人が、「差があること」「個性的であること」「マイペース」を理解することが大切だと考えます。話し合いの中で出された「道草・寄り道・後戻り」が、私たちの気持ちをぴったり表現しています。
- ・子どもたちが「できた！」「わかった！」と感動できる場を作れるといいと考えます。
- ・電子メディアを使ったコミュニケーションよりも、表情のわかる、直接のコミュニケーションこそが大切だと考えます。一言で言えば「face to face のコミュニケーション」です。

私たちの提言

「できるようにになりたい」のにできない子どもたちに機会を作ろう

大人が、「差があること」「個性的であること」を理解し、子どもたちが「できた！」「わかった！」と実感できる場を作ること提言します。

【具体的なアイデア】

- ・地域の人材バンク、大学生、退職した方のボランティアを募集して、各公民館で「寺子屋教室」(つまずいているところを乗り越える個人指導)をします。
「できた!」「わかった!」と実感できる場に
- ・上級生が下級生に教えたり、同級生同士で教え合ったりする場にもなります。

「蕨市アウトメディア宣言」を生かした子育てをしよう

子どもたちの心と体の健やかな成長のために、電子メディア接触を減らし、生まれた時間で人と人の face to face のコミュニケーションを増やしていくことを提言します。

【具体的なアイデア】

- ・仲間や親子でいろいろな外遊びができるように公園(冒険遊び場等)を工夫します。遊びを通じたコミュニケーション(NPO「冒険遊び場」との連携など)
- ・在住外国人や姉妹都市等との交流を推進します。

子どもを地域全体でサポートしよう

子どもを地域全体でサポートし、若い人も大人も参加したボランティアで子どもたちとそれぞれの分野で交流をはかり、活力ある人材コミュニケーションをもって、子どもたちを支援するべきと提言します。

【具体的なアイデア】

- ・地域での大人と子どもとのコミュニケーション
登下校の時間や、公園での見守り、子どもをほめる・家族をほめる・声をかけ、時には叱ることも
その中で大切なことを伝えていく機会に

教育委員会の「見える化」をしよう

教育方針、先生の配置、異動、いじめや落ちこぼれなどの情報をタイミングよく共有し、「見える化」することで、保護者の理解と協力を得た学校運営や確かな学力の向上をはかることを提言します。

【具体的なアイデア】

- ・意見交換の場を設け、子どもを含め、みんなでコミュニケーションを強化する。
- ・学校の教育方針を地域の人々に発信、地域で子どもたちを見守り育てる。
- ・子どもの格差が生じない学習指導と学校での教育の充実

テーマ 2 おとな：学ぶ楽しさを共有する

提言の背景

生涯学習については、蕨市では各公民館、体育館その他の施設を使ってかなり多くの市民が活動していると思います。ただし、利用している人の多くは複数の団体に所属していますが、一方、そうした施設の活用の方法を知らない人や、他人とのかかわりを嫌う人がいて、そうした施設を不要という人さえいます。

私たちの視点

高齢者が多くても清潔で安心して住む事が出来、明るく元気な市民がいる蕨市でありたいものです。そこで、生涯学習への参加や高齢者の元気の維持について提言します。

私たちの提言

生涯学習に参加できるように誘導する

さまざまな方法で情報を伝えるとともに、地域の人材を活用して、生涯学習に参加できるように誘導していくことを提言します。

【具体的なアイデア】

- ・退職後の男性（特に）が地元で溶け込む方法を考える
- ・高齢者の生きがいを手助けする方法を学ぶ
- ・異世代との交流（地域の学生など）
- ・市民講座の内容を市民から募集する
- ・公共施設をもっと開放する

元気な高齢者を育てる

退職後の男性、子育て終了後の女性などは先ず自分の健康を維持するための努力をすることが大切です。体が元気ならば自分が得意なことを地域に還元してそれを生き甲斐にすることができます。

元気な高齢者でいるためには次が大切と考えます。

- ・積極的に外出して色々な人と話をする
- ・外出すればおしゃれをする（おしゃれは元気の元です）
- ・自分に合った運動をする
- ・もちろん毎日の食事に気を配る

【具体的なアイデア】

- ・病院の待合室が高齢者のサロンにならないように。
蕨市内の閉められたままの店など空家を借りて絵画、市民の作品などの展示を

したら、人が集まるし、買物、飲食などで街の活性化も図れるのではと思います。

生涯学習の情報をうまく伝える

生涯学習の活動に関する情報を様々な方法で伝えていきます。口コミという face to face のコミュニケーションが最も効果的ですが、インターネット等も積極的に活用するとよいと思います。

【具体的なアイデア】

- ・ 口コミで情報を伝える
- ・ HP で掲示板を利用する
- ・ 市民の関心を呼ぶようなパンフ作り
- ・ 公共施設の開放と活用状況を示す
- ・ 公民館に募集パンフはあるが、結果（応募・参加状況）をパンフづくりに生かす



テーマ 3 ボランティア：支えあうことでともに学び育つ

提言の背景

全国的に核家族化、少子高齢化が進む中、人間関係が希薄になっています。困ったときに相談する相手がおらず、問題を自分の中に抱え込むことが増えているように思われます。

一方、平成 25 年、団塊世代が地域社会に参入してきました。現役を引退し、今後どのような行動をなすべきかを迷っています。まだまだ仕事をしたい人もいるでしょうし、社会貢献活動をしたいと思う人もいるでしょう。この人たちの持つ潜在能力を引き出す仕組みを作ることが必要な時代となっています。この世代の住民が持つ特徴として、対人関係、指導力、体力、資金力、経験と多様な能力を所持していることがあり、この財産をまちづくりに活用すべきです。

私たちの視点

困ったときに相談する行政の窓口は確かに用意されています。ただ、少々敷居が高く、相談しづらいことも事実です。もっと身近なところで親身になって相談できる、話を聞いてくれるところがあれば。一方で人生の先輩として、知恵を持った人たちもたくさんいます。その両者を結び付けることで、お互いに支えあっていけるようになればと思い、相談窓口と人材バンクの設立を提言します。

私たちの提言

相談窓口（巡回なんでも相談、インターネット相談）の開設

- ・巡回なんでも相談

毎月もしくは毎週日程を決め、公民館等の公共施設を利用して、困りごとの相談窓口を設けます。

- ・インターネット相談

この程度のことで直接出向くのは...、と躊躇したり、日中は時間が取れない場合を考え、常設のインターネット相談窓口を設けます。

- ・巡回相談でもインターネット相談でも次に配慮します。

- ・行政が相談内容を受け、専門機関や部署の紹介・ボランティアへの橋渡し等を行います。一度の対応で済むこともあれば、継続が必要なこともあります。

- ・ボランティアを紹介する場合、該当するボランティアが複数名いる場合は、相談者の希望をさらに詳しく聞くことも必要です。

相談ごとに関する人材バンクの設立

- ・窓口の開設に先立ち、ボランティアの募集・登録を行います。それぞれの職歴、

特技、資格、経験等によって、自分のできることを登録します。

(専門的なことから、買い物の代行、学習指導、子どもの送迎、子育ての悩み相談など、多岐にわたります)

- ・実際に相談を受けるようになってから、必要となった項目については、広報や公民館便り、インターネットを通じて随時募集し、内容の充実を図ります。
- ・内容によっては、有償にするのかどうか、また、保険が必要かどうかも検討が必要です。活動場所が必要なときには、行政が提供します。



< 別表 「市内の施設等」 >

市役所 市議会 選挙管理委員会 市立病院 保健センター
市立図書館 学校給食センター 蕨サンクチュアリ
市民公園 市民体育館 富士見スポーツ公園 プール 交通公園
市民会館 公民館 児童館 児童センター 文化ホールくるる
交流プラザさくら
蕨駅 蕨警察署 消防署 蕨郵便局 浄水場
小中学校 教育委員会 蕨高校 武南高校 歴史民俗資料館
和楽備神社 三学院 河鍋暁斎記念美術館 中山道 城跡公園 桜並木
お祭り・イベント
市内在住外国人
スポーツクラブ ゴルフ練習場 ボーリング場 道場 碁会所
24時間スーパー(各社) ツツミ OKIシステムセンター
オプトエレクトロニクス リンテック 大日本印刷 コープ商品検査センター
蕨ケーブルビジョンWINK 愛工舎製作所(戸田市)
中日新聞埼京工場(戸田市)

- ・・・「コンパクトシティわらび」には官民様々な施設が徒歩圏にある・・・
- ・・・市内施設等の役割を知り、社会の仕組みを学べば立派な社会人になれる。 国際人にも！・・・

< 参 考 >

「学び育つまち・わらび」には様々な面があります。今回は、3つのテーマに絞り込んで提言をまとめましたが、その他にも多くのことがらが話題になりました。

ここには、時間的な制約があって、メンバー全員の共通認識には至りませんでした。市民も職員も学び育ち、成熟していくことで、市民がまちづくりに参画し市行政とも連携したまちづくりが可能になるという観点からまとめられたものです。提言の参考として掲載させていただきます。

テーマとして「学び育つ」の持つ概念：

平成 25 年、団塊世代が地域社会に参入してきた。現役を引退し、今後どのような行動をなすべきかを迷っている。まだまだ仕事をしたい人もいるであろうし、社会貢献活動をしたいと思う人もいるであろう。この人たちの持つ潜在能力を引き出す仕組みを作ることが必要な時代となってきた。この世代の住民が持つ特徴として、一般的に言われている評価とは対人関係、指導力、体力、資金力、経験と多様な能力を所持している。この財産を地方自治体は活用すべきである。

コミュニティ振興策

現在、市と住民（市民）との「かかわり」としては、

- 蕨市 - - 議会
- 自治会
- 町会
- 老人会
- 婦人会
- 子供会

等とのつながりが一般的ではないか。この「つながり」組織は、過去の時代から継続されてきた日本の地縁組織であり、今後も継続されてゆくであろう。そのことを踏まえ、次のことを提案したい。

< 市役所職員の地域社会活動への参画（地域担当制） >

タイトルをつけるとするなら、地区重視の行政となろう。内容としては、担当業務（所属部署）は、もちろん第一義であるが、ワンステップアップの業務として、特定の地区を指定し、その地区の疑問点、問題点を把握して、所内にて討議し対策を考える仕組み。なお、当然のことであるが、職員の研修も必要となれば、大学教授等の学識者を招き、レベルアップを図る。この意図する目的は、地域住民の声に、これまでに以上に耳を傾け、職員が住民と対等な目線で協働することにある。

< コミュニティの問題解決法のひとつ（他の市の事例） >

A、若者の参加を得ている

- B、若者の参加を促進するための具体的な方法手段
- C、金銭の問題（労働費、交通費、活動費等）
- D、参加方法が簡単なこと
- E、議論は少なく行動は多く
- F、最初はリーダーが引っ張る（少人数からのスタート）
- G、その活動結果として人が集まる。その後は若者の特徴文化であるインターネットでの広がりが起きる

行政への提案について

各種行政機関への名称及び取扱業務の公開(市の広報紙で蕨の良さを周知させる)。現在、広く行き届いているであろう行政機関であるが、敷居が高い。気軽に相談に行くことができるための広報活動の徹底、職員による PR 活動が必要。各種行政機関を PR するために。

利用状況のお知らせ（毎月の広報誌にて）

来訪を促進するために、気軽さをアピールする文言をタイトルに記入する

発信の手段としては、地域情報コーナーの設置

コーディネーターの必要性：市民からのリポーターや専門家からの指導を受ける

情報センターの設置：ボランティア、臨時職員（パート、アルバイト等）、有償

or 無償か

行政による市民への指導（？）

一般的に言われることは、公共サービスは行政が提供すべきことで我関せずが多数派である。また、市政に対し、陳情あるいは要請はするが、その後の詰めがない。後はよろしくの他力本願派が主流である。よって以下のアクションが必要である。

アンケート方式

ヒアリング方式

市政モニターの活用

アイデア、意見等の公募

住民説明会の開催（シンポジウム、フォーラム）

地域別勉強会の開催

ワークショップの活用

上記のような市民から知り得た情報を収集し、妥当性や改善点を見出し検討する。その後、政策案として認めた場合、市民に発表する。

4 みんなで支え合うまち・わらびグループからの提言



《メンバー》(敬称略・50音順)

赤松奏子

石村英司

木村洋子

福地茂雄

前博雄

松本和昭

高谷祥平(市職員)



《提言一覧》

テーマ1 子育てしたいまち わらび

テーマ2 住みよい高齢社会づくり

はじめに

話し合いの経過

このグループでは、保健・医療・福祉という、とても幅広い分野について毎回討論を重ねてきました。現在子育て中の人から孫がいる人まで、さまざまな世代のメンバーが集まるなか、それぞれの世代が気になっていること、問題点や課題を挙げ、未来の蕨市をどのようにしていきたいかを話し合ってきました。話し合っていくなかで自然と、「子育て支援について」「高齢者支援について」というテーマに目を向けることが多かったように思います。

基調となる考え方（よく話し合われていたこと）

「ゆりかごから墓場まで…」この言葉はイギリスの手厚い社会保障制度を表すスローガンです。生まれた時から死ぬ時まで、福祉（社会保障制度）が万全に整備されているといった意味があるそうです。

私たちは未来の蕨市を、このスローガンのように、小さな子どもから高齢者までみんなが生きやすいまち、生まれてから生涯を終えるまでずっと蕨に住んでいたいと思えるようなまちにできたらいいなと考えます。

より具体的には、安心して子どもを育てられるまち、子育てしながら女性が働きやすいまち、住んでいる人みんなが生きがいを持てるようなまち、地域との関わりがあり孤独を感じないまち、市や人の気遣いが感じられるまち、新しい住民も溶け込めるまち、安心して医療や介護が受けられるまち。そんな一生安心して暮らせるまちにできたらいいなと私たちは考えます。



テーマ1 . 子育てしたいまち わらび

提言の背景

～子育てしながら働くことが難しい～

- ・女性の社会進出が進み、共働き家庭が増えるなかで、仕事と子育ての両立が大きな課題となっています。
- ・出産後になかなか保育所が決まらず、仕事を辞めたり、働き方を変えざるを得ない女性は少なくありません。このため、保育を必要とするすべての子どもが入所できるよう、待機児童の解消が課題となっています。
- ・さまざまな働き方に対応するため、夜間や休日などの多様な保育サービスが求められています。また、保育所によっては運動できるほどの広さがない場合もあるため、保育設備の充実も課題となっています。

～子育て情報が家庭に届いていない～

- ・市や県からさまざまな子育て情報が発信されていますが、現役の子育て世代から見ると、家庭にうまく届いていないと感じています。
- ・また、蕨市のような都市部では、核家族化が進み、子育てについて相談相手がいないために、地域で孤立している子育て家庭がいることが問題となっています。
- ・初産や転入直後の市民などにとっては、子育て情報の入手方法がわかりにくく、また、地域の子育て世代のコミュニティに初めて参加する時にハードルが高いと感じています。
- ・子育て家庭が地域で孤立しないよう、子育ての悩み相談、友だちづくりなどのための仕組みづくりが課題となっています。

～子どもの病気やけがの時に安心して診てもらえる医療体制となっていない～

- ・市内では小児科医が少なく、蕨市立病院の小児科も午後は4時までとなっています。
- ・全国的に小児科医の確保が年々難しい社会情勢となっていますが、市内で安心して子育てするために、小児医療の充実は欠かせません。

私たちの視点

蕨市で産み育て、そして、その子どもたちが成長し、蕨で産み育てていく、そのような「蕨子育てサイクル」の確立を目指す。

(2) 子育て情報の発信方法

誰もが子育てに関する有益な情報を入手できるように、手軽で利用しやすい情報発信体制づくりを提言します。

利用しやすい子育て情報発信体制を構築する

- ・携帯電話やスマートフォンに対応した子育て情報サイトを構築する。バーコードリーダーを用いて、子育て専用ページに登録できるようにする。盛り込む内容として次のものが考えられる。

【子育て情報コンテンツの例】

- ・埼玉県救急医療情報センターの電話番号（048 - 824 - 4199）
救急車を呼ぶほどではないが、緊急に受診が必要なときや、休日・夜間などに、受診可能な医療機関を24時間電話で案内。
- ・児童館・子育て支援センターでの「行事カレンダー」
- ・子どものグッズ・洋服ゆずります「リサイクルの輪のページ」
- ・同じ月生まれの子たちの集まる日を設定し、紹介
ベビーマッサージ、悩み相談などを組み合わせて数回のコースで行う。これにより、ママ友だちをつくったり、同窓会の開催につながることを期待できる。



情報発信方法を充実する

- ・特に、初産や転入者など情報が入手しにくい市民のために、民生・児童委員などが子育て家庭への積極的な情報提供を行う。
- ・児童館や子育て支援センターなどで、各種講座の様子を動画でいつでも気軽に見られるようなサービスを実施する。
- ・市内の乳幼児向け店舗など企業と連携した情報発信を行う。

(3) 小児医療体制づくり

子どもが病気になった時に安心して受診できるように、専門医の確保、救急医療の充実など小児医療体制の充実を提言します。

小児医療を充実する

- ・市立病院の受付時間（現在は16時まで）を延長する。
- ・市立病院と休日・平日夜間急患診療所が連携して、小児救急医療（初期救急・第二次救急）を24時間体制とする。
- ・小児科病院の誘致政策を推進する。（クリニック、医師個人の誘致でも可）
- ・県が実施する医師育成奨学金や研修医研修資金の貸与制度に上乗せした独自の政策を展開するなど、市内の医師確保・育成に努める。

既存の救急対応の取り組みを周知し活用を促す

- ・市民が医療について気軽に相談できるよう、埼玉県救急医療情報センターの電話番号（前ページを参照）の活用を促す。
- ・子どもの急病時の対応方法などを示した「子どもの救急ミニガイドブック」の活用を促す。



テーマ2 . 住みよい高齢社会づくり

提言の背景

～高齢になっても健康で生きがいを感じながら暮らすことは難しい～

- ・全国と同じく、蕨市でも今後ますます高齢化が進行することが予測されています。こうしたなか、高齢になっても趣味を楽しんだり、働くことなどによって、生きがいを持って暮らし続けられるような環境づくりが求められています。
- ・このように、高齢になっても地域で活躍するためには、健康で心身ともに自立した生活を送ることが重要です。そのために、早い時期から、健康について学ぶ機会や運動する機会が必要です。

～必要な情報が届いていない高齢者や地域のなかで孤独を感じている高齢者がいる～

- ・現在、市が行っている高齢者のためのさまざまな取り組みが知られておらず、必要なサービスを利用できていない人もいます。例えば、定期健診や福祉サービスなどの有益な情報が、必要な人に行き届くように工夫していく必要があります。
- ・また近年増加している一人暮らし高齢者や高齢者夫婦のみ世帯は、地域から孤立しがちで、孤独死や老々介護などの深刻な問題が起こっています。特に男性は地域と関わりを持とうとしない人も多くいます。このため、地域全体での見守り、高齢者と地域との関わりづくりが課題となっています。

～地域の医療・介護体制に不安を感じる～

- ・市立病院は原則午前だけの診療で、また24時間の救急医療体制が整っていないなどの問題があり、必ずしも市民にとって利用しやすいものとはなっていません。
- ・また、在宅介護の実態は見えづらく、特に介護する側への支援が見過ごされがちであることが問題です。

私たちの視点

高齢になっても生きがいを持って、自立した生活を送ることができ、地域と関わり合いながら、安心して楽しく生活できる社会を目指す。

私たちの提言

(1) 生きがいづくり・就労支援

高齢になっても、生きがいを持って暮らせるように、まず、前提となる健康づくりについて提言します。そして、高齢になっても趣味を楽しんだり、働き続けることができ、地域と関わりを持てるような環境づくりを提言します。

健康寿命^(注)の延伸を支援する

(注) 平均寿命のうち健康で自立した生活を送ることのできる期間

- ・高齢になっても心身ともに自立した生活を送るためには、早い時期からの健康づくり(骨貯金、筋肉貯金など)が大切である。このため、市民それぞれの状況に応じた健康づくりのための環境を整える。

《具体的なアイデア》

- 日中働いている世代を対象とした、平日夜間に運動できる場所の充実
- 高齢者を対象としたスポーツ競技会“マスタース”の開催(年齢別、吹き矢など)

働き続けられる環境をつくる

- ・子育て家庭の仕事と子育ての両立を支援するために、子育て経験のある高齢者が、自宅などで預かり保育を行う。(早朝出勤、残業などにも対応)
- ・学童保育や小学校の放課後クラブで、高齢者が囲碁・将棋教室を指導する。(指導員は登録制)
- ・専門技術を持った高齢者(水道関連、おもちゃ修理など)を活用する。公的機関で助手として雇用することも考えられる。
- ・高齢者の就労先を確保するため、蕨市民公園に、畑や田んぼをつくり、植え付けから収穫、収穫物の販売、調理したもののレストランや売店での販売を行う。

居場所や交流の場をつくる

- ・高齢者が趣味やスポーツを気軽に楽しめるよう、地域の公民館の行事などを充実、活性化する。
- ・高齢者が地域の人と交流できる場を充実する。

《具体的なアイデア》

- 高齢者向けゲームコーナー

スポーツ等のクラブは初心者と上級者の技術に差があり、初心者が参加しにくい。そこで、誰でもできる遊びとして、昔ながらのゲーム(ピンボールやパチンコ、射的など)やテレビゲーム(体を動かしながらできるもの)ができる場所をつくる。体や脳のトレーニングをしながら、コミュニケーションを図ることができる。また、このようなゲームであれば、子どもたちとともに遊ぶこともできるため、幅広い世

代の交流の場にもなる。

➤ コミュニティ・カフェ

高齢者の孤立問題、介護する側への支援不足に対応するため、高齢者の居場所として、また高齢者を支える家族の悩みの相談所として、コミュニティ・カフェをつくり活用する。

高齢者は自らの知識や経験を活かして悩みの相談に乗ったり、講座や教室を開いたりする。また、悩みを持つ人は、そこで相談をしたり、同じ悩みを持つ人たち同士話し合ったりする。カフェという形式ならば、今まで相談の窓口に行きづらいとためらっていた人も比較的参加しやすいと考えられる。

【参考文献】

経済産業省(2011)「ソーシャルビジネス・ケースブック～地域に「つながり」と「広がり」を生み出すヒント」

CASE36 地域のシニアの専門性を活かしたコミュニティ・カフェ

(2) 情報発信・見守り体制づくり

市が行っている高齢者のための取り組みを、より多くの人に知らせるため、これまでの情報発信以外の方法を提言します。

高齢者向けの情報冊子を作成・配布する

- ・市が行う高齢者向け施策の紹介、相談窓口やボランティア等の問い合わせ先をまとめた簡単な冊子を作成する。これを市内公共施設やコミュニティ施設に設置したり、高齢者調査等で高齢者宅を訪問する際に配布する。高齢者への情報発信は、繰り返し行うことが大切である。

高齢者同士で情報を伝え合う

- ・市民から市民への情報発信を促すため、各種事業・サービスなどの体験談を高齢者自身が講座などで発表する機会を充実する。県の彩の国いきがい大学の卒業生などを活用することも考えられる。

地域で高齢者を見守る体制をつくる

- ・高齢者の孤立を防ぐため、民生委員、町内会等による定期訪問を行う。
- ・電気、ガス、水道業者など民間事業者による日常的な見守りを行い、高齢者世帯に異常を発見した場合には市が報告を受け、対応できる体制をつくる。



(3) 医療体制づくり・介護支援

病気や介護が必要となった時、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるような医療体制や介護支援体制づくりを提言します。

安心して医療を受けられる体制をつくる

- ・市立病院の体制強化を図るとともに、近隣市との医療連携を促進することが望まれる。現在、戸田市の医師会との連携はなされているが、加えて川口医師会との連携も検討する。

介護支援体制を充実する

- ・介護される側はもちろん介護する側のサポート体制の充実を図る。また、老老介護、単身高齢者など介護体制が不十分と思われる方への支援策を講じる。安易に施設入所させるのではなく、自宅介護できる環境と支援体制を構築していくことが重要と考える。

サービス付き高齢者向け住宅を市内各地域に整備する

- ・2025年には団塊世代が75歳になり、一人暮らし高齢者や老老介護が現在の何倍にも増加することが予想される。そこで、自宅介護と施設での介護それぞれの長所を合わせた「サービス付き高齢者向け住宅」(平成23年10月から施行された新しい住宅形態)を市内各地域に建設する。
- ・原則として要介護1～5までの人が利用可能だが、住宅によって受け入れ態勢は異なるので、蕨市独自の補足規定をつくり、蕨市に30年以上住んで税金を納付した方は申し込み資格ありとし、50年以上住んで税金を納付した方は特別優待制度ありとすることなどが考えられる。これによって、若い人たちも自分たちの将来を考え、蕨市に移住することも期待できる。

【サービス付き高齢者向け住宅の特徴】(参考：千葉県野田市ココファン尾崎台)

- ・生活支援サービス(安否確認や緊急通報) 外部から自分の希望する医療・介護サービスを自由に利用できる。必ず見守りの目があるのでひとりでも安心して生活できる。また、今まで住んでいた地域にあれば、入居を希望すれば住み慣れた地域を離れずに子ども、親戚、友人とコミュニケーションがとれ、今まで通りの生活ができる。費用なども比較的安価である。